

宮島柚果

2023年度に開催された三つの講演では、初学者にも配慮した丁寧な説明がなされ、実際の社会問題との接続が試みられており、哲学を専攻としない学生にとっても有意義だったと思う。以下では、各講演の内容に触れながら私の所感を述べる。

8月3日に行われた堀田義太郎氏による「ヘイトスピーチ・推論主義・社会集団」という講演は、ヘイトスピーチを含む社会的マイノリティに対する差別や抑圧を、推論主義という枠組を用いて批判することの有効性と意義に関するものであった。推論主義は、言葉や文の意味を推論——対話者が発話から引き出せること——の中で果たす役割として考える。この理論によると、差別的な発言がいかなる言語行為であり、害をもたらすのかは、社会的・歴史的文脈のうちで発言が果たす推論上の役割を踏まえて理解することができる。堀田氏によると、差別語の使用やヘイトスピーチは、既存の集団間の不平等な関係を前提に、集団を敵と味方へと切り分け、被差別者に従属的地位を付与する機能を持つ。また、ヘイトスピーカーは、支配的な仲間集団への同一化を呼びかけ、自らをその一員として位置づける行為を行っており、差別の維持、強化という帰結をもたらす。これは発話が意図的であるか否かによらない。

私は、差別的な表現やヘイトスピーチが持つ意味を、話し手の意図や悪意に還元することなく説明されていた点に魅力を感じた。現代的なレイシストは、差別の存在を認めず、歴史的背景を顧慮せずに被差別者の劣等処遇の原因を被差別者自身に帰する傾向にあるように思う。話し手の意図に依存せずに言葉の含意を扱うことができるのは、今日の差別に関わる事例の分析に有用だろう。またヘイトスピーチや差別的な発言が持つ差別の強化という隠れた機能の指摘も興味深かった。例えば、相手に向けて直接発言をしていなくても差別的な発言の聞き手を差別の共犯者にしうことや、周囲に向かって呼びかけていなくても、被差別者に話し手の（差別者）仲間の存在を

想起させ、恐怖を与えることが説明されていた。この議論は、差別的な発言は対象者に向けられていないなら無害であるとか、単に個人の意見として述べているだけなら問題はない、という見解の妥当性を問いただすことにつながるだろう。この講演に関連して私は次のことに関心を抱いた。例えば大人の女性に対する「女の子」という言葉の適用が差別的であるか否かは、女性の中でも判断が分かれることがあるように思われるが、これが差別的な表現か否かはそれが推論のうちで持つ役割によって決定されるのだろうか。こうした点については今後も考えていきたい。

10月16日に開催された福家佑亮氏による「党派性による政治的無知の克服は可能か？——政治認識論からの検討」という講演は、デモクラシーとその対抗構想の一つであるエピストクラシー（知者による統治）の比較に関わるものであった。エピストクラシーを擁護する立場には、政治的に「正しい決定」を行うためには、政治に関する知識、例えば統治機構の構造、外交政策、社会科学や自然科学の基礎的な知識に対する無知や、バイアスを取り除くべきであり、知識や能力に応じて（被）選挙権を分配すべきである、というものがある。それに対してデモクラシーを擁護するためには、市民の政治的無知が克服可能であるかを検討することになる。福家氏は、個人が無知でも集合知を活かすことによって優れた決定ができるという認識的デモクラシーの検討を行い、認識的デモクラシーを擁護する二つの立場——党派性をヒューリスティックとして使用することの合理性を主張する立場と、当人の利害関心や道徳的考慮が科学的知識の受容に影響を与えることを正当化し、党派性の影響を正当化する立場——によって政治的無知を克服することができるという見解をそれぞれ批判する。そして、道具主義で前提とされている「正しい決定に必要とされる知識」を問いただす。政治的知識は、社会的に恵まれない立場の人の方が欠く傾向にあると言われているが、彼らが権利侵害の

体験をすることで政治的知識を持つことになると思うこともできるのだ。しかし福家氏は、この指摘自体が政治的無知の問題を解決するわけではないとしていた。

本講演を聴き始めた時私は民主主義以外の体制を考慮することに対して抵抗感があったが、現在の体制を所与のものとして考え、「なぜデモクラシーなのか」を考え、正当性を問い直すことの重要性を学んだ。また、民主主義の体制を受け容れるなら、その批判には留意する必要があるように思った。例えば、環境破壊に関して正しい知識を持ち、環境保護を推進する政党を支持することは重要であるように思われる。その一方で環境破壊に対して懐疑的な農村部の人は、環境保護政策によって不利益を被っており、環境破壊についての誤った認識を持つよう動機づけられるかもしれない。しかし、国の政策によって、農村部の人の暮らしが困窮するという情報も政治的な決定において重要である。今日、環境や労働者の人権に配慮して生産された商品は相対的に高価格になる傾向にあり、環境保護を掲げる政党を支持する人はそうした商品を購入する余裕がある人が多いのかもしれない。そのような人は農村部の人の困窮について無知である傾向にあると言えるだろう。こうした有権者集団相互の無知のために、民主主義的決定が適切なものとならないかもしれないという懸念はわかる。「正しい」政治的決定のために必要な知識や能力を持つことが人間にいかんして可能なのか、また市民が、特に科学的知識を持つことが「正しい」政治的決定にどれほど重要なものであるのかは論争の余地があるが、いずれにしてもデモクラシーに対する批判を検討するのは意義があるように思った。

12月11日に開催された佐藤静氏の「倫理学とフェミニズム」の講演は、倫理学とフェミニズムに関する入門的な話から始まり、その二つが交差して議論されてきた「ケア」に関わる問題と、それに対する既存の議論の限界を指摘するものであった。質疑応答においては、フェミニスト倫理学とケアの倫理との関係、フェミニスト倫理学が果たしうる役割等についてお答えいただいた。

佐藤氏によれば、フェミニスト倫理学は、シス男性——出生時に割り当てられた性別とジェンダーアイデンティティが一致した男性——以外の視点から倫理学について問い直すものであり、全ての人を男女の二つに分割し、女性の権利のみを擁護するものではない。佐藤氏がフェミニズム思想史の概要を批判的な意見を交えながら説明しているのを聞くと、ジェンダーだけではなく、貧困層と

富裕層、カラードと白人、農村部と都市部、障害の有無といった差異もあることを踏まえ、事例ごとの個別具体的な事情や、道徳判断に対する周囲の環境の影響を重視されていることがわかった。キャロル・ギリガンの発達心理学の議論から影響を受け、フェミニズムの視点から倫理学が問い直されるようになると、「ケアを必要とする人のケアを誰が担うのか」という問いが浮上する。ケアは生存に必要不可欠なものであるが、ケアに関わる労働は無償または低賃金であり、歴史的には女性が担ってきたという問題状況は今日では広く認知されている。フェミニストはこの問題に取り組み続けてきて、もちろん、社会学やフェミニスト経済学ではケアに関わる問題の分析がなされており、家事育児の女性の負担と、それによる経済格差の問題等が議論されている。

女性の社会進出の進展に伴い仕事と家事の二重負担が生じ、先進国では移民をケアワーカーとして雇うことでケアの負担から解放されることを選ぶことがある。これによって生じるケアのアウトソーシングの連鎖は、グローバル・ケア・チェーンと呼ばれる。佐藤氏は、この問題をジェンダー不平等や性差別という視点のみによって分析することに疑問を呈し、ケアの倫理を被抑圧者の視角からの倫理として考えた。確かに、先進国のペイドケアワークを担う途上国の移民には女性が多く、ジェンダー的な視点からの分析は重要である。しかし講演を通じて、社会学者ホックシールドが指摘した、途上国の人が自らの子どもに注ぐはずだった愛情が、先進国の子どもに注がれるという問題や、人間が生きている限り生活必需品とそのための労働を誰かが担わなければならないという認識は既にアリストテレスの奴隷論の中に見られることを知った。ニーズが満たされない存在がいて、誰かがケアを担わなければならないという事態は、性差別の問題としてみるだけでは解決できない、という佐藤氏の考えには私も同意できる。富裕層のケアを貧困層が担い、ケア提供者やその子どものケアは放置されるという問題は、制度上奴隷制が廃絶されている現代でも引き継がれているし、また教育を十分に受けられない人や貧困層のシス男性も、自分はケアを受けられずに、他の誰かに対してケアワークをすることもあろう。

社会学やジェンダースタディーズとの協働を試みる際、倫理学にできることが何かを佐藤氏に伺うと、実証研究では扱いきれない問題に取り組むことができることだと答えて頂いた。実証的な研究、例えばインタビュー調査

では、心理的負担から証言ができない、あるいは少ししか証言できない人の経験がこぼれ落ちることになる。倫理学であれば、それに対し思考実験を通して真理を探求することができる。私は倫理学の役割について疑問に思うことがあるが、簡単に言語化できないものを考えていくというような姿勢に共感した次第である。

三つの講演を通し、今まで考えていなかった問いを考える機会を持ち、哲学・倫理学と他分野の学問との関係性や倫理学の在り方について改めて考えさせられた。講演者の方々に心より感謝申し上げる。